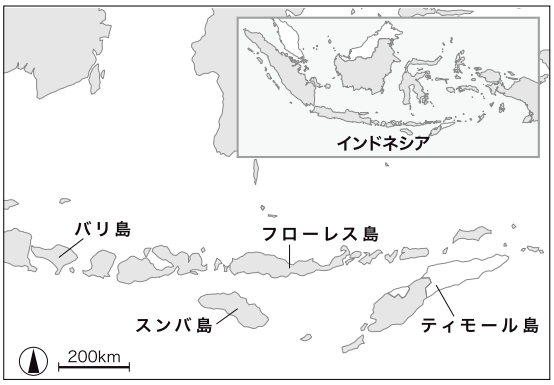
【報告】第93回民族学研修の旅

インドネシア東部、ヌサトゥンガラ諸島の住まいを訪ねる



講師：佐藤 浩司
期間：2019年6月7日（金）～18日（火）［12日間］

①スンバ島の集落

二〇一八年に続き、インドネシアの個性豊かな木造家屋を訪ねる旅に出かけてきました。一万を超える島々に二〇〇以上の民族が暮らすインドネシアでは、家屋や集落の配置や方位、その装飾やシンボリックな形状に、人びとの世界観を見ることができます。今年は東部に位置するフローレス島、ティモール島、スンバ島をめぐりました。

自然素材を利用する家は、少なからず電力に頼る現在の暮らしにおいて、火災を度々招くなど不向きに感じられる一面があります。一方で、窓のない漆黒の屋内、家や集落のいたるところに見られた祭祀的な空間、効率を優先すれば意味を見出すのが難しい大きな屋根、家の前や集落の中心に眠る祖先の墓を見るにつけ、住まいが人間のみの所有物ではないこと、人ひとりの存在が個人だけのものではないことを実感する旅になりました。観光資源として復元された村も訪問しましたが、共同体やそこで育まれた文化の維持、継承についても考える機会になりました。道中、丁子やカカオ、カシュー（ナッツ）など、わたしたちには珍しい植物を探して寄り道したのも楽しい旅の思い出です。

参加者の記録とともに、旅の様子を報告します。

■写真
猪股玲子さん　古口順子さん
高田真理さん　中坪功雄さん
事務局

■スケッチ
椙田道行さん

②カシューの実。先端の突起部分の殻のなかにウルシ含有の油脂分に包まれてナッツがある

④ンガダ人の集落

③マンガライ人の集落

【行程】

■6月7日（金）バリ島
出国。インドネシア バリ島のデンパサールへ。

■6月8日（土）バリ島、フローレス島
空路、フローレス島へ。着後、世界最大のオオトカゲコモドドラゴンを探してリンチャ島へ。リンチャ島を含むコモド国立公園ではドラゴンの保全のために二〇二〇年より入島規制がおこなわれる。ボートでの帰路、漂海民バジャウの定住集落を訪問。⑥

■6月9日（日）フローレス島
以降四日間、フローレス島を西から東へ横断。初日はマンガライ人の集落を訪問。蜘蛛の巣のような円環状の水田で知られる彼らの家は巨大な円錐形の高床式住居。訪問したのは観光政策で復元された村。車でアクセスできる場所にあり現在は復元家屋のみ。伝統的な家屋は外壁に沿って家族ごとに仕切られ、講師が調査した一九八六年当時、別の村では、八家族五一人が同居する家があったという。③

■6月10日（月）フローレス島
朝、マンガライ人の特徴的な村落構造をのこす村を訪ねる。溶樹を植えた広場を囲んで家が並ぶ。広場は祖先の墓地でもある。市場を散策後、カカオ農園のあいだを縫って東へ。ヤシ酒の蒸留施設を見学。高木のロンタルヤシを身ひとつで登り果実を採取する姿はお見事。途中、丁子やカシュー（ナッツ）の木を見つけて寄り道。②⑦⑧

■6月11日（火）フローレス島
早朝、有志で河原の温泉へ。朝食後、ンガダ人の集落を訪問。ンガダ人の集落は、広場を軸線に高床の家屋が向かい合って並ぶ。広場には男女の始祖をそれぞれ祀った祭祀施設や巨石記念物が配置されている。ひとつの村は保存集落に指定されており、細部は伝統的な構造が失われていたが、別のある村は村人総出で家を建てる準備をしていて生活感があふれていた。④⑤

■6月12日（水）フローレス島
クリムトゥ山の早朝ハイキング。雨天でご来光は断念↘

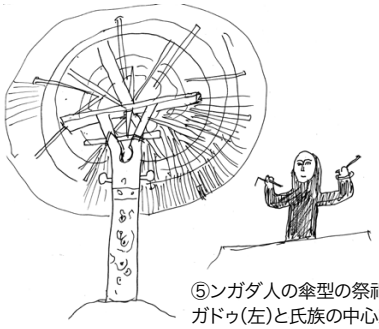
参加者の感想

一九八〇年代から仕事でインドネシアを訪れており、民族で独特の形状の屋根をもつ家屋や集落に関心がありました。多くの家で窓もなく光が入らない暗闇空間があり、家屋は単に「住む」場所ではなく儀礼の場でもあるという説明に納得。場所によっては母胎の象徴でもあるという話も頷け、内部空間もじっくり拝見できました。

（井上保孝さん）

同じンガダ人の村でも、掃除の行き届いた家の軒下で機織りにいそしむ景観整備されたB村と、村人総出で竹を割り、屋根づくりをしているW村を訪れて「活きた村」のあり方を考えさせられた。マンガライ人の円環状の水田と住居空間・集落構造との共通思想、宇宙観を聞き出したときの講師の目の輝きは忘れられない。

（西村昌司さん）



⑤ンガダ人の傘型の祭祀施設ンガドゥ（左）と氏族の中心家屋の屋根に飾られるサカ・ロボ（右）

したが、下山後、麓の水田に沸く温泉に立ち寄った。朝食後、リオ人の集落を訪問。祖先の墓地でもある円環状の広場を家屋が囲む。氏族の中心家屋はひときわ大きく、東インドネシア最大の木造建築。講師の調査宅にお邪魔して窓のない屋内の暗さを実感する。部屋の隅、天井、仕切りの奥の小部屋など、家のいたる所に祭祀的な役割が見て取れた。⑨

■6月13日（木）フローレス島、ティモール島

空路、ティモール島へ。ティモール島は西半分がインドネシア領。着後、東ヌサトゥンガラ州の歴史と島々の手仕事を紹介する州立博物館を見学。宿泊先に向かう道中、ロティ島からの移住者が営むロンタルヤシを加工する店に立ち寄る。ロンタルヤシは建築や手工芸の材料、食用にも利用される有用な植物。ロンタルヤシの葉でつくった彼らの伝統楽器ササンドの演奏を楽しんだ。

■6月14日（金）ティモール島

ティモール島西部の主要民族ダワン（アトニ）人の集落へ。ダワン人の伝統的な家は核家族単位で暮らしていたという丸い家。見学した家は、日常的な居住空間としての機能は失われていたが、出産小屋としていまも利用されているという。村には小さいながらも権力の象徴であり、集会場としての機能をもつ穀倉もあった。最近まで外部との関係をもたなかったというその村では、村人の口上で迎えられ、王族の方から話を聞いた。踊りと食事でもてなしてもらった。⑩

■6月15日（土）ティモール島、スンバ島

空路、スンバ島へ移動。島民の三割が祖霊マラプを信仰するスンバ島の家の特徴は、中心が大きく突き出たとんがり屋根。マラプの居場所である屋根裏は家のなかでもっとも神聖な場所であり、人間の居住空間も儀礼活動と生活するための空間が区別して配置されている。

■6月16日（日）スンバ島

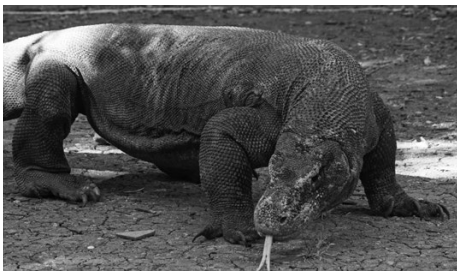
終日、スンバ島の集落を訪ねる。ある村は結婚式の準備で賑わい、ある村では島独自の騎馬戦パソーラを見せてもらった。訪問先のひとつは全焼したのちに再建した村。その隣の村で伝統的な構造を維持する古い家屋を講師が見つける。囲炉裏の煙に燻され、使い込まれた柱や床に相霊と暮らしをともにしてきた年月を感じる。①⑪⑫

■6月17日（月）スンバ島、バリ島

空路、スンバ島からバリ島へ。塩づくりを見学したのち、バリ島の先住民バリ・アガ人の家を探す。屋敷のなかに用途の異なる建物を配置するのが彼らの家の特徴。観光化された村では建物それぞれの用途は変化していたが、伝統的な配置をのこす家を見つけることができた。ケチャダンスを鑑賞しながら夕食。その後空港へ。

■6月18日（火）

帰国。



⑥コモドドラゴン。大きいものは体長3mにもなるという

⑦フローレス島の市場。テンペやヤシ砂糖、生きたままのニワトリも売っている

⑧ロンタルヤシの果実の採取。命綱をつけず木に登り、重い実を腰に下げておりてくる

⑨リオ人の集落。氏族の中心家屋は東インドネシア最大の木造建築

⑩ダワン人の村で踊りを鑑賞。自然染織の布も美しい

⑪結婚式の準備。早朝さばいた豚を調理する

⑫伝統的な構造を維持するスンバ島の家。主柱に鼠返しがあるのは西部集落の特徴